

# 共に創り上げる校内研修

— 小学校外国語・外国語活動の授業づくりと評価についての研修を事例として —

## Collaborative Creation of OJT :

A Case of In-service Training on Lesson Planning and Assessment for Foreign Language Education in Elementary Schools

尾上 利美

ONOE Toshimi

(和歌山大学教育学部)

高岡 美奈

TAKAOKA Mina

(泉南市立一丘小学校)

浪元 悦子

NAMIMOTO Etsuko

(泉南市立西信達小学校)

2022年7月19日受理

### Abstract

Teacher training for elementary school foreign language education has been conducted since the announcement of the Course of Study for elementary schools in 2017. There are basically two forms of teacher training: Off the Job Training (Off-JT) and On the Job Training (OJT). Off-JT can provide training to many teachers, but it is difficult to provide training based on the current situation and needs of each school. OJT can focus on a particular issue in the area or school, but the number of teachers who receive training is small. This paper presents a process and implementation of OJT focusing on lesson planning and assessment for elementary school foreign language education.

**キーワード**：小学校外国語教育、校内研修 授業づくり、評価

#### 1. はじめに

令和2(2020)年度に完全実施となった新しい小学校外国語教育に役立てるため、文部科学省は、2017年に『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』をウェブサイトに掲載した。その中の「研修指導者編」において、英語教育推進リーダー中央研修、中核教員研修、各学校の校内研修の結びつきや概要、効果的な実施方法等を示している。文部科学省をはじめ、各自治体の教育委員会、大学、民間団体、各学校等が、様々な形で小学校外国語教育のための教員研修をこれまで行ってきた。これらの研修によって成果も得られてはいるが、小学校教員が今なお課題として挙げるものがある。それは、評価の仕方である。

例えば、株式会社イーオン(2021)が実施した132名の教員を対象とした小学校の英語教育に関するアンケート調査では、「児童の評価の仕方」を課題に挙げる教員が最も多く、22%(64名)であったことが報告されている。この「評価の仕方」は、過去2回の調査(2019年夏、2021年春)でも第1位であり、教員が継続して「評価の仕方」を課題として認識していると指摘されている。松井他(2020)も「これまでに筆者らも小学校外国語活動・外国語の研修を担当することがあったが、小学校教員の多くが評価の仕方が分からず、困っている姿を見てきた。」(p. 211)と述べ、小学校教員のこのような課題に対応するために、松井他(2018、2020)では、「話すこと」を評価するための教員研修用動画を作成

し、それらを用いた教員研修の様子を報告している。これらの報告での教員研修は集合研修(Off the Job Training；以下Off-JTとよぶ)の形式である。Off-JTは、多くの教員に向けて研修を行うことができるという利点がある一方で、各学校の現状やニーズに基づいた研修を行うことは難しい。学校単位での研修、つまり校内研修(On the Job Training；以下OJTとよぶ)であれば、その地域や学校で特に必要とされている内容に焦点化した研修を実施することができ、OJT後も、日々の教育実践を担う教員同士で研修内容を確認し、授業を行い、さらなる課題を共有することもできる。OJTは、規模は小さいながらも大きな効果が期待できる研修形式である。そこで本稿は、令和元年度から3年度までの3年間にわたる授業づくりと評価についてのOJT事例を報告し、学校の現状とニーズに合ったOJTの共創に必要なことを述べる。

#### 2. 小学校外国語・外国語活動の授業づくりと評価についてのOJT事例

##### 2.1 西信達小学校の研究主題とOJT体制

大阪府泉南市にある西信達小学校は、児童数約300人の中規模校である。研究主題を「主体的、対話的で深い学びをめざして」と定め、研究授業や公開授業、夏季研修会等のOJTを通して、日々研鑽を重ねている。令和元年度に研究主題にせまる教科・領域として外国語活動および外国語科を選択し、令和元年度から3年

度までの3年間取り組みを進めてきた<sup>2)</sup>。研究主題に関わる取り組みを主導するのは、校内分掌の一つである学習指導部<sup>3)</sup>で、令和2年度は主任を高岡、副主任を浪元が務め、令和3年度は主任を浪元、副主任を高岡が担当した。授業研究の中心を担うのは副主任ではあるが、前年度からの役割が入れ替わったという経緯から、高岡と浪元で研究授業や研修会の時期およびそれらのおおまかな内容について相談しながら進めた。

研究授業の学習指導案検討は、西信達小学校ではチームに分かれて行われている。チームは、研究授業を行う授業者と同じ学年を受け持つ担任、他学年の担任、特別支援学級の担任、担任外の教員等で構成され、全ての教員が必ず年に1度は研究授業の学習指導案検討に取り組む体制がとられている。学習指導案の検討は、研究授業の2か月ほど前から開始される。2度の校内検討の中で練り直し、同じ学年の他のクラスでの事前授業を経て、再度校内で学習指導案が検討され、研究授業が実施されるという段取りである。研究授業の後には、討議の柱を明確にし、KJ法を用いたグループ討議と発表で構成される研究討議会が行われる。

## 2.2 令和元(2019)年度のOJT

5月10日に校内外国語研修会、11月17日に3年生で、11月26日に5年生で研究授業が実施された。ここまでは、校内に閉じた形での研修であった。その後、外部支援者がいる方が、OJTがより充実するのではないかとこの考えのもと、前校長から尾上へ参画の依頼があった。令和元年度末2月19日の外国語研修会において講師を務めて以来、研究授業の学習指導案検討と指導助言および夏季研修会講師として、継続的に西信達小学校のOJTに尾上に関わることとなった。

## 2.3 令和2(2020)年度のOJT

年度当初に浪元から全体に向けて、前年度からの成果と今年度の取り組みについて説明を行った。しかし、他校から異動してきた教員も多く、外国語活動や外国語の授業を担当した経験のない教員もあり、共通理解を持つことが難しかった。そこで、浪元らは、3年生から6年生の担任にアンケートを実施し、現状の把握とニーズの掘り起こしを行い、授業づくりと評価に関することに大別されるニーズがあることがわかった。

<授業について>

- ・単元活動やゲームなどのアクティビティをもっと知りたい。
- ・文字指導の仕方
- ・チャンツや英語の歌を知りたい。
- ・1時間の授業の流し方(くわしく)
- ・板書の書き方
- ・自分のしている授業でいいのか迷いながらやっています。

ます。

- ・単語を覚える活動をもっと知りたい。
- ・発音やアクセントの付け方が微妙なので、正しい英語を伝えられていない。(CD-ROMも使っている。)ただ、ネイティブの先生がいてくれるとありがたいな、と感じることがあります。

<評価について>

- ・ふりかえりで何を書かせたらいいかよく分かっていません。(文章表記のところ)
- ・ふりかえりで書いたことを、どう評価すべきか理解していない。(A、B、Cの規準)
- ・CDで流した音声が開いているかのチェックの仕方。(流す速さや何回ほど聞かせたらよいか、など)
- ・外国語活動の中のどういった活動で、どういったタイミングで評価をすればよいか悩んでいる。
- ・評価のあり方や、テストなどどのようにしたらよいか、いまいわかりません。

特に上記下線部のニーズには、授業での指導と評価を一体的に計画する「逆向き設計」(e.g., 西岡・石井, 2019)の考え方を示すことが有効ではないかと尾上が提案し、「未習単元の具体的な単元計画、評価、授業の流れを逆向き設計によって示す」という研修内容が決定した。西信達小学校で使用している『Junior Sunshine 5』(開隆堂)の「Lesson 8 What would you like?」が選ばれ、図1の内容で夏季研修会が行われた。

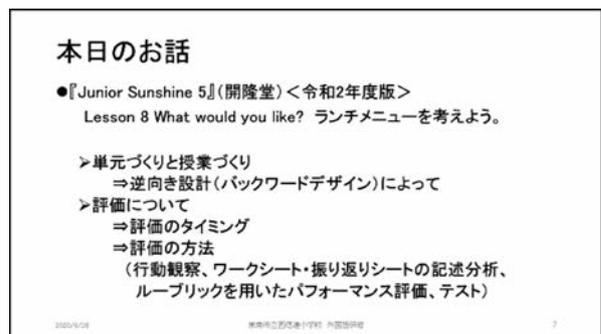


図1：2020年8月26日の研修会のアウトライン

上記の研修の内容やその時に行われた質疑の内容を総括した「外国語夏季研修 まとめ」がその後作成されている<sup>4)</sup>。このまとめには、「単元計画は、逆向き設計で」「指導は、インプットからアウトプットへ」「指導と評価の一体化」「各学年からの質問」「研修の内容から、来年度できること」と項目ごとに整理され、研修内容を踏まえたさらなる取り組みへの道筋も示されている。

12月9日に5年生で行われた研究授業は、研修会で扱った単元と同じ単元が選択され、「井戸先生にバランスの良いランチメニューを考えよう!」という単元名

のもと、逆向き設計を意識した8時間構成の単元が計画された。「いろいろな食べ物や飲み物を買う時の数字・値段表現を知り、表現に慣れる」を本時の目標とした第3時の授業で、児童が興味関心を持ち、児童に関わりのある学習となるよう工夫された授業だった。

## 2.4 令和3(2021)年度のOJT

『令和3年度 教育指導の計画』(泉南市立西信達小学校、2021、p. 89)の「授業研究推進計画」には、児童につけたい力として「自分の考えをもち、伝え合う力」と明記され、外国語活動・外国語科においては、「友達や先生などに外国語で伝わる経験を通して、もっとしゃべってみたい!使ってみよう!と思う子どもを育成する。」と具体化されている。この力をつけるための具体的な手立ても、次の4点が示されている。

- ・ 授業や生活の中でクラスルーム・イングリッシュをたくさん使う。(あいさつ、ほめ言葉、リアクションなど)
- ・ 振り返りシートやCan-doリストの活用
- ・ 付けたい力を明確にした逆向き設計の授業づくり(ゴールから考える)
- ・ ルーブリックを用いた評価

二つ目の手立てにある振り返りシートやCan-doリストは、西信達小学校で作成した各レッスンの振り返りシート及び3年生から6年生のCan-doリストのことで、令和2年度より活用されている。授業や単元で何を目指したらよいかが明示されており、各教員が授業づくりをする際の土台となっている。三つ目の手立てである「逆向き設計の授業づくり」は、昨年度の研修会、研究授業参観、それに向けての指導案検討を通して、教員間で一定の共有がなされつつあった。

### 2.4.1 研究授業(4年生 外国語活動)

令和3年度最初の研究授業が7月2日に4年生の外国語活動で行われた。『Let's Try!2』の「Unit 3 I like Mondays.」を用いて、単元名を「ニコラス先生に、自分の好きな曜日を伝えよう」(全4時間)と設定された。「好きな曜日とその理由を、たずねたり答えたりできるようになろう。」を目標とした第3時の授業が展開された。「自分の好きな曜日とその理由をニコラス先生に伝える」という単元末の活動が遂行できるように、その活動で必要になる語彙や表現に繰り返し慣れ親しみ、インプットからアウトプットへと上手く配置された単元計画と第3時の授業であった。授業後は、「児童が主体的・対話的に授業に参加できていたか」を討議の柱とし、グループ討議と発表が行われた。

## 2.4.2 夏季研修会

### 2.4.2.1 企画

4年生の研究授業・討議会の後に、筆者らで、夏季研修会の内容についての打合せを行った。浪元より、これまでのOJTによって授業づくりの成果は出ていると考えられるので、ルーブリックの作成と活用をねらいをしぼった研修会にしてはどうかとの提案があった。令和2年度より学習指導部会の下部組織である「外国語」の担当でもある浪元は、教育委員会等から送られてくる外国語関連の文書から、ルーブリックについて知識は得られたものの、その作成や授業内での活用についての具体的なイメージはつかめないうままであったこと、また、令和2年度の通知表改定で外国語の評価が観点別の3段階評価に変わり、どう評価していいかわからないといった教員の声を聞いていたことが理由であった。ちょうどそんな折に実施された令和2年度の夏季研修会で、尾上よりルーブリックの活用や大学院生が作成したルーブリックの例が示されたことから、令和3年度は、ルーブリックを校内全体に広めることができなかと考えていたところであった。研修内容の具体化にはさらに時間が必要との判断で、後日、改めて打合せをすることになった。

### 2.4.2.2 打合せにおける研修内容と構成の具体化

8月6日の午後、筆者らでZoomを用いて打合せを行った。話し合われた内容が研修会の内容へとどのように繋がったかを以下に示す。

#### ①パフォーマンスを評価するためのルーブリック

今年度も異動により教員の半数程が入れ替わり、ルーブリック自体について馴染みのない教員もいるとのことだった。そこで、ルーブリックの概要についても研修では簡潔に触れること、指導と評価の一体化ということを考え、単元全体の流れの中での評価、そしてそこで使うルーブリックという位置づけが明確になるように研修会で扱うこととした。

#### ②ルーブリックの作成と活用

昨年度の夏季研修会でもルーブリックの見本を見る機会はあったが、小学校の教員達だけでそれを見ながら作成するのは実際のところ難しいという現状があるようだった。具体的にどんな手順で作るか等が示されると、2学期からの授業にも活かそうであり、また、ルーブリックを実際に使ってパフォーマンスを評価する体験があると、より具体的な活用方法が見えるのではないかという意見が、浪元・高岡より出た。さらに、高岡より、担任している6年生で1学期末に実施した「話す(やりとり)」の評価をするためのインタビューテストの経験が共有された。児童の受け答えを想定し、このような答えが出来たらAというように、簡

単なルーブリックを作成し、学年で評価の基準を合わせるために、相担の教員とも話し合ってルーブリックの調整も行った。インタビューテストにおいて、大半の児童は、ルーブリックに記された姿を見せたが、中には高岡の想定を超えた返答をする児童もあり、ルーブリックがあっても評価が難しい場合もあったとのことであった。

ルーブリックは、パフォーマンスを構成する要素(観点)ごとの学習者の具体的な姿を記述したものである。ルーブリックの作成には、パフォーマンス時の学習者の姿をどれくらい明確に記述できるかが肝要であることから、外国語活動や外国語の授業を担当していない教員もいる中で、学習者の姿を明確にして、2時間程の研修会の中でルーブリックを作成することは、非常に難しいと言わざるを得ない。そこで、あらかじめルーブリックは尾上が作成し、ルーブリックを作成する時の手順を研修内で説明をする形をとることとした。

ルーブリックで記述される学習者の姿は、あくまで予測される学習者の姿であって、実際のパフォーマンスで学習者が見せる姿はそれとは異なる場合もある。ルーブリックで示されている姿、そしてそれとは異なる姿も評価する体験ができるように、また、複数の評価者間では評価の揺れも当然考えられ、それをすり合わせる経験ができるようなパフォーマンス動画があると研修内容がさらに充実する。以上のことから、研修会で使用するルーブリックと共に、それに合わせたパフォーマンス動画も、研修会までに尾上が撮影して準備することになった。

研修会では、他の教科書の中から題材を選ぶこととした。言語材料や表現はどの教科書も大きな差はないが、教科書内での言語活動の配置や場面設定、使われているチャンツ・歌・ゲーム等は、教科書ごとに異なる。使用教科書ではない他の教科書を見ることも、授業づくりに対する気づきやアイデアを得るために有益と考えられるからである。そこで『Here We Go! 6』(光村図書)の「Unit 4 Summer Vacation」の単元末に設定されているポスターを使って自分の夏休みの思い出を発表する活動を評価の場面とすることにした。

### ③ クラスルーム・イングリッシュ

7月の研究授業に参観に来られていた西信達中学校の英語科教員より、クラスルーム・イングリッシュの使い方についての指摘があったことが浪元、高岡より共有された。英語が得意な教員ばかりではなく、英語の発音等に自信が持てなかったり、英語自体が苦手だったりする教員にとっては、クラスルーム・イングリッシュ自体もハードルが高いという現状がある。クラスルーム・イングリッシュとして使いたい表現の一覧を教室に掲示などしているが、なかなか使いこなすというところには至らないとのことだった。

中学校とは異なり、小学校では英語で授業を行うことは学習指導要領で求められてはいないが、児童が「聞いてわかる英語」を増やすためにもクラスルーム・イングリッシュを授業で使うことは有効である。そこで、クラスルーム・イングリッシュの取り入れ方等について、また、英語母語話者ではない人が母語に影響を受けながらも英語を使用している様子を実際に見てもらうことで、教員側の英語の発音などに対する苦手意識や自信のなさを軽くできるのではないかという意図のもと、研修の最後に加えることとした。

### 2.4.2.3 夏季研修会の実際と研修会後の感想

8月25日に高岡の司会により「ルーブリックによる評価とクラスルーム・イングリッシュについて」というタイトルで、14:00~16:00の2時間行われた。当日のアウトラインは図2のとおりである。

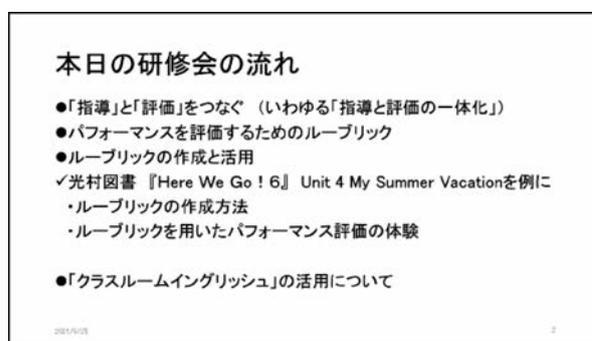


図2：2021年8月25日の研修会のアウトライン

本研修の主たるねらいが「ルーブリックの作成と活用」であること、また紙幅の都合上、このねらいに関わる研修内容と教員の感想のみを以下に詳述する。

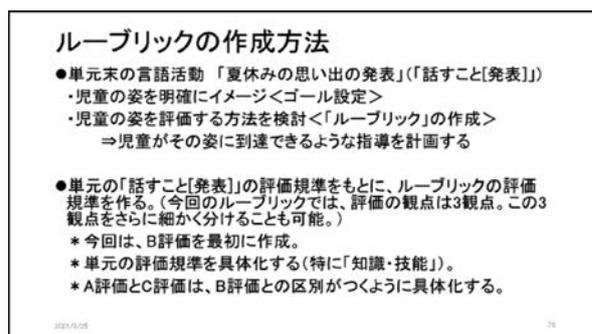


図3：ルーブリックの作成方法

ルーブリックの作成方法は、図3のスライドを提示し説明した。「夏休みの思い出の発表」をルーブリックで評価する体験をしてもらうために、尾上が「話すこと[発表]」の評価規準をもとに評価用のルーブリック<sup>5)</sup>(資料1)、6種の発表用のポスター(資料2)を作成した。また、ポスターを手にもって夏休みの思い出の発表を二人の協力者に演じてもらい、録画した。以下は、発表内容、想定したA~Cの評価、発表の様子、発話スクリプトである。想定した評価は左から、<知

識・技能><思考・判断・表現><主体的に学習に取り組む態度>の観点別評価、最後は総合評価である。

①白浜 想定した評価<A-B-A, A>  
(アイコンタクトしながら、早口だが大きな声で発表)  
My summer vacation. I went to Shirahama. I enjoyed swimming. I enjoyed the fireworks. It was great.

②夏祭り 想定した評価<A-A-A, A>  
(アイコンタクトしながら、相手に伝わっているか確かめるようにゆっくり、はっきり、大きな声で発表し、deliciousと言う時に、ポスターを前方へ移動)  
Hello. My summer vacation. I went to the summer festival. I ate a candy apple and yakisoba. It was delicious. Thank you.

③イオンモール 想定した評価<B-B-B, B>  
(大きな声ですらすらと発表しているが、一本調子で早口。アイコンタクトあり)  
I went to Wakayama Aeon Mall. I enjoyed shopping. It was fun.

④山 想定した評価<B-A-B, B>  
(ゆっくり大きな声で発表、アイコンタクトあり)  
I went to the mountains. I ate curry and rice. It was great.

⑤プール 評価<C-C-C, C>  
(ポスターを見たまま一度も顔を上げずに発表)  
I ... I went to the swimming pool. えーと  
It ... it was fun.

⑥動物園 想定した評価<C-C-B, C>  
(ポスターを見たまま一度も顔を上げずに発表し、ポスターには、I went to the zoo.と書かれているが、発表時にtheは発話されず)  
I went to zoo. I enjoyed panda. It was great.

上記の6種類の発表動画を用いて、ループリックを用いたパフォーマンス評価の体験を行った。発表動画の視聴順は、⑥→③→②→⑤→④→①で、まずは、個人で評価をする間に3回再生した。次に、6グループに分かれて個人の評価をグループ内で共有し、高岡・浪元が準備をした「夏季研修会 話し合いメモ」に集約をしてもらった。グループ内で評価を共有する間も、各グループの求めに応じて、特定の動画を何度か再生した。その後、グループごとに1分程度で評価の揺れやループリック活用について発表をしてもらった。表1は、想定の評価とグループで評価を共有した時に、

どのような評価の揺れがあったかをまとめたものである。

表1：想定の評価とグループでの評価共有

視聴順	ポスター番号	想定の評価	グループでの評価共有
1	⑥動物園	C-C-B<C>	B, C
2	③イオンモール	B-B-B<B>	B
3	②夏祭り	A-A-A<A>	A
4	⑤プール	C-C-C<C>	C
5	④山	B-A-B<B>	B, B+, A
6	①白浜	A-B-A<A>	B, A

ポスター番号③②⑤の発表の総合評価は、どのグループ内でも評価の揺れはなく、⑥④①では揺れがあることがわかる。このような違いが生じた理由として考えられるのは、観点別の評価にばらつきがあるか、ないかという違いである。③②⑤の観点別の評価は、例えば、③では、観点別の評価がB-B-Bで総合評価もBであり、総合評価と観点別の評価が同じである。一方、⑥④①の観点別評価はばらつきがあり、例えば、⑥では観点別評価はC-C-B、総合評価はCである。③②⑤の発表はループリックが示すA~C評価の典型的な例であったので評価が誰にとっても明白であったが、⑥④①はループリックで示される姿から少し外れた発表の様子を評価しなければならなかったため、どの観点到重きをおいて発表を評価したかによって揺れが出たものと考えられる。「夏季研修会 話し合いメモ」にも、⑥の発表について「1回で見とるのは難しい。文と言葉が間違っている。意見が分かれた。」「知・技はC、思・判・表はアイコンタクト等がなかったのでC、主体的CとBにわかれた。」といった記述が残されている。児童の発表を実際に評価する場合にも、評価に迷う場合が多々あると想定される。研修の中でこのような体験をしておくことは有効であったと考える。夏季研修会のふりかえりシートに書かれた教員の感想を高岡と浪元は「ループリックについて」「指導計画、授業づくりについて」「クラスルーム・イングリッシュについて」と項目ごとに整理しているが、夏季研修の主たるねらいであった「ループリックについて」(評価しやすい けど 評価しにくい)の部分のみ以下に示す。

評価しやすい

- ・評価の観点が明確になった。
- ・子どものパフォーマンスを正確に評価できると思った。
- ・見えにくいものを可視化できた。
- ・学年でループリックを共有しておくことで評価の統一ができる。
- ・どの教科でもできればと思った。

評価しにくい

- ・ルーブリックがあっても評価が難しいので、必須だと感じた。
- ・先生によって評価が分かれたり、1回では判断ができなかったりする点が難しい。自分も評価規準をしっかりと理解しておかなければならないと改めて思った。
- ・評価のために動画をとっておくことも有効。
- ・学年間でのすり合わせも重要。
- ・評価基準をしっかりと理解し、自分のものにしておくことが大切だと感じた。

これらの感想は、ルーブリックの評価ツールとしての使い勝手の良さ(評価しやすい)もあれば、難しさ(評価しにくい)もあるということを自らの体験を通して意識されていることを示し、実際に使って評価をした体験があるからこそその感想であろう。今回の研修会の企画者かつ参加者でもある浪元と高岡は、ルーブリックの単なる説明ではなく、実際の使い方を知ってもらえたこと、また、具体的なルーブリックの作成・活用法が提示されたことが大きな成果であったと述べる。

「お話は聞いて理解できたけど、じゃあ実際にやってみるときどうするの?」と困ってしまう教員も多いなか、この「具体的」「実際に役立つこと」は非常に重要である。研修で発表動画を見て評価した体験は、授業時に児童を評価することにつながり、評価した後にグループで意見交換した体験は、ルーブリックの作成や評価基準を合わせるための教員間の話し合いにつながることから、具体的に満ちた実際に役立つ体験型の研修になったと考える。

#### 2.4.3 研究授業(5年生 外国語)

2回目の研究授業は11月22日で、『Junior Sunshine 5』『Lesson 6 My Hero』を単元名「Who is your hero?」(全5時間)とした第5時の授業であった。授業では、27人の児童の発表を授業者だけでなく参観者もルーブリックを使って評価をするという場面が設定された。これは、浪元・高岡より授業者へ夏季研修会で学んだことを生かして、実際の子どもたちのスピーチを研究授業内でルーブリックを使って評価するという内容にしてほしいと依頼したからである。校内で統一してやっていくには、この形が良いのではないかという意図からである。また、夏季研修会と研究授業を一つの流れの中で計画するという新しい試みでもあったといえよう。授業後の研究討議会では、「ルーブリックを用いた評価の良かった点・難しかった点(改善点・課題)」を討議の柱とし、グループ討議と発表が行われた。

#### 3. OJTの成果と共に創り上げるOJTに必要なこと

OJTは学校独自のニーズに合わせた研修内容が設定でき、日々の教育実践の中で、研修内容を授業に「活かす・確認する・課題を発見する・改良する」いわゆるPDCAサイクルを回すことができる。西信達小学校の3年間のOJTは、1・2年目で「付けたい力を明確にした逆向き設計の授業づくり」を校内に定着させ、3年目は、新課題として見いだされた児童のパフォーマンスを評価する手法を理解し、授業での活用へつなぐサイクルが上手く回った事例である。また、継続的なOJTの中で変化していくニーズを把握し、それに即座に対応できたことも、OJTならではの成果であろう。

筆者らは、大学教員と小学校教員であり、日々それぞれの場所で教育に携わっているが、西信達小学校のOJTを創り上げるための一つのチームであった。このチームが上手く機能し、より良いOJTを実施するためには、それぞれの立場で為すべきことをし、それらを持ち寄ってチームで検討することが必要である。

まず、最も大切なことは、現状の把握とニーズの的確な掘り起こしである。令和2年度に浪元・高岡が行った「3～6年生の担任への外国語活動・外国語アンケート」はその一つであるが、アンケート調査以外でも、日々の教員同士の会話、子ども達の学習の様子の観察などからも、現状把握とニーズの掘り起こしは行われた。学校のある地域や子どもの現状を最も理解しているのはその学校の教員であり、「外から見えるものも確かにあるが、日常的・継続的な研修・研究が実践を支えているのである。」と、村川(2015, p. 204)が述べるとおりでである。

浪元・高岡らの的確な現状把握と掘り起こされニーズに対して、外から支援するのが尾上の役割である。木原(2015)は、「学校研究」を「学校を基盤とする教師たちの授業づくりやカリキュラム開発に関する研究的実践」(p. 208)と呼び、大学研究者も、外部支援者として学校研究を支える立場にあるという。「学校研究」の支援の方法として、①授業づくりに資するリソースの提供、②授業づくりのモデルや好事例の提供、③授業づくりネットワークの提供の3点を挙げるが、今回の尾上が行った支援は①と②に相当するだろう。

現状とニーズ、それらに対する支援をどんな形で組み合わせると良いかをチームで検討し、OJTへつなぐ具体を引き出すことも肝要である。外部支援者からは喫緊性や重要性において等しくみえるニーズも、現状を知りニーズを掘り起こした教員ならば、順位づけや重みづけをすることが可能である。外部支援者は、これまでの経験から、どのような研修にどれぐらいの時間が必要かについての積算が可能である。限られたOJTの時間で最大限の効果をあげるためにも、チームでの検討は不可欠である。また、良いチームになるた

めには、思い立った時に相談できる、お互いに尋ねたいことを聞くことができる関係性の構築はいうまでもない。筆者らは、電話、メール、Zoomを活用し、緊密に連絡を取りあうことができた。

#### 4. おわりに

OJTを企画・運営する側の努力や熱意だけでは、充実したOJTを創ることは難しい。なぜなら、OJTには、その研修に参加する他の教員がおり、積極的に参加しようとするその他の教員の姿によって、企画・運営する側は、良い研修にするための力が湧いてくるからである。西信達小学校のOJTの様々な場面でも、教員全体が協力して積極的に参加しようとする姿があり、筆者らの原動力になったことは言うまでもない。また、職員の方のサポートにも助けられた。

西信達小学校の外国語活動・外国語の授業では、子どもたちの頑張りをねぎらう定番のフレーズがある。このフレーズは、研究授業後の討議会のしめくくりの場面でも、授業者らをねぎらう時にも使われている。これまでのOJTの成果は、西信達小学校の教員そして職員全員の力によるものであった。西信達小学校流に、次の言葉を贈りたい。“Nishishinsho teachers and staff, ××(二拍手), good job!”

#### 謝辞

泉南市立西信達小学校校長の上中和則先生、教頭の藤原芳史先生をはじめ、西信達小学校の教職員の方々に深くお礼を申し上げます。校内研修の運営、研究授業の授業者、参観者、討議への積極的な参加者として、様々な場面でご協力をいただきました。そして、西信達小学校に外部支援者として尾上を繋いでくださった前校長の右馬隆治先生、尾崎彩子先生、尾崎将平先生にも感謝致します。また、研修用の動画を作成するにあたり、和歌山大学観光学部教授の東悦子先生、和歌山大学教育学部4回生の家郷貴一さんにもご協力をいただきました。お礼申し上げます。

#### 引用文献

- イーオン株式会社(2021)、「小学校の英語教育に関する教員意識調査2021夏」  
<https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/2109021000.html>(参照日 2022.7.19.)
- 木原俊行(2015)、学校研究に研究者が参画するために、千々布敏弥(編)『結果がでる小・中OJT実践プラン20+9』、教育開発研究所、p.208-213
- 泉南市立西信達小学校(2021)、『令和3年度 教育指導の計画』  
 西岡加名恵・石井英真(編著)(2019)、教科の「深い学び」を実現

- するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか、日本標準
- 松井孝彦、松井千代、杉浦正成、白鳥晃紀、額綱将志(2018)、小学校外国語「話す」領域における評価のための教員研修用ビデオの作成と試行、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要、vol. 3、p.53-58  
[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=6623&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6623&item_no=1&page_id=13&block_id=21)(参照日 2022.7.19.)
- 松井孝彦、松井千代、額綱将志、臼井菜々子、都築雄也、永田眞子(2020)、小学校外国語「話すこと」と「自己調整学習」の評価のための教員研修—研修用動画の作成と活用—、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要、vol. 5、p.211-216  
[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=7718&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7718&item_no=1&page_id=13&block_id=21)(参照日 2022.7.19.)
- 光村図書(2020)、小学校外国語科(英語)Here We Go! Teacher's Manual ①指導書6、光村図書
- 村川雅弘(2015)、ワークショップ型研修による学校改革、千々布敏弥(編)『結果がでる小・中OJT実践プラン20+9』、教育開発研究所、p.202-207
- 文部科学省(2017)、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)(参照日 2022.7.19.)

#### 注

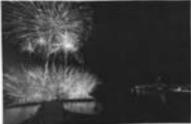
- 1) 本稿の内容の一部は、「学校の現状とニーズに沿う校内研修の在り方—外国語・外国語活動の授業づくりと評価についての研修を事例として—」(発表者 尾上利美)というタイトルで、第22回小学校英語教育学会 四国・徳島大会(2022年7月17・18日)において、自由研究発表として口頭発表した。
- 2) 西信達小学校では、研究主題にせまる教科および領域を1つ定め、おおむね3年間継続して探求している。
- 3) 学習指導部会には、授業研究、読書教育、ICT教育、外国語、道徳教育等の下部組織があり、それぞれに担当教員が決められている。
- 4) このまとめは、『令和2年度 研究主題 主体的、対話的で深い学びをめざして』という冊子に収められている。西信達小学校では、毎年、このような冊子を作成し、研究主題の成果として蓄積している。
- 5) ルーブリックの作成にあたっては、『Here We Go! 6』の指導書(p. 239)に示されているUnit 2 Welcome to Japan内のグループで行うプレゼンテーションを評価するためのルーブリック等を参考にした。

資料1 「夏休みの思い出」の発表 評価用ルーブリック

観点	評価規準	A	B	C
知識・技能	自分の夏休みの思い出について、本単元で学習した語句や表現から成る3文程度の英文を用いて、出来事や感想を発表することができる。	自分の夏休みの思い出について、本単元で学習した語句や表現の他に既習の表現を付け加えながら3文以上の英文を用いて、出来事や感想を発表することができる。	自分の夏休みの思い出について、本単元で学習した語句や表現から成る3文程度の英文を用いて、出来事や感想を発表することができる。	自分の夏休みの思い出について、本単元で学習した語句や表現から成る3文程度の英文を用いて、出来事や感想を発表することができない。
思考・判断・表現	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表している。	聞き手によりよく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、わかりやすくなるよう工夫をして発表している。(伝える工夫の例：声の大きさ、アイコンタクト、気持ちをこめている、大切な内容を伝える語に強勢をおいている、発表の方法に工夫がある 等)	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表している。(伝える工夫の例：声の大きさ、アイコンタクト 等)	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表していない。
主体的に学習に取り組む態度	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表しようとしている。	聞き手によりよく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、わかりやすくなるよう工夫をして発表しようとしている。	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表しようとしている。	聞き手によく伝わるように、学習した語句や表現を用いて、夏休みの出来事や感想を順序だてて構成し、発表しようとしていない。

資料2 「夏休みの思い出」発表用ポスター

My Summer Vacation



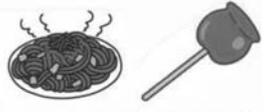
I went to Shirahama.

I enjoyed swimming.

I enjoyed the fireworks.

It was great.

My Summer Vacation



I went to the summer festival.

I ate a candy apple and yakisoba.

It was delicious.

My Summer Vacation



I went to Wakayama Aeon Mall.

I enjoyed shopping.

It was fun.

左から①②③

My Summer Vacation



I went to the mountains.

I ate curry and rice.

It was great.

My Summer Vacation



I went to the swimming pool.

It was fun.

My Summer Vacation



I went to the zoo.

I enjoyed panda.

It was great.

左から④⑤⑥